

今こそ本気の国際化を

高橋 聡 東北大学多元物質科学研究所 教授



最近、私は虎になりつつあるかもしれないと思います。虎に翼ではなく山月記の虎です。あるポッドキャスト番組にて、誰もがそれぞれのこじらせを原因とした虎になる可能性があるという山月記の解釈を聴き、自分もそうかもしれないと思うようになったのです。

私は2010年から東北大学の外国人向け学部英語コースの立ち上げと運営に関わってきました。学生実験も含めて全ての講義を英語化し、入試方法を試行錯誤し、学生をケアする努力が実り（もちろん私だけの努力ではありません）、現在、本コースにはアジア諸国を中心に優秀な学生が入学し、勉学に励むようになりました。入試倍率は4倍を超えます。学部卒業後に大学院に進学し、修士や博士の学位を得る学生も多数現れています。このコースに関わったことは、この大学への私の唯一の寄与ではないかと思うこともあります。

ではなぜ虎になるのか。それは、外国人コースが日本人コースと歴然と区別されているためです。教員配置、学生が選べる講義や配属可能な研究室において二つのコースは独立とされ、コース間の教員の融通はもとより、日

本人学生が英語講義を受講することも許されません。そのために学生間の交流は進まず、学生から見た時に、この状況は差別と言われかねないのではないかと恐れます。これは変だという意見を、私個人やグループとして繰り返し表明していますが、本質的な状況は動きません。今では、私は教授会で不規則発言を行う面倒な教員と見なされているように思います。飲食の場で、日本人コースを担当する友人との関係を損なった経験もあります。孤立し他人や自らを傷つけるとしたら、それはまさに私が虎化しているのではないのでしょうか。

男女共同参画は、女性の機会や環境が男性と異なることを指摘する真ちゃん達により改善してきたのだと思います。だから、日本人と外国人を区別したままの国際化の問題点についても、継続して指摘する必要があるのでしょうか。分子研レターズにこの文章を載せられることも、虎のなせることとお許しいただきたいと思います。

私は総研大の一期生であり、当時の分子研の先生方が新しい教育課程の立ち上げに取り組む情熱を感じながら博士課程を過ごしました。この間に、私

には教育や研究における理想主義が植え付けられたのだと思います。その芽を、東北の地ではうまく育てることができず、虎へと変異させてしまったかもしれない私から、心からのお願いがあります。分子研は今こそ本気の国際化を目指してほしい。常勤の教授として外国人研究者を雇用し、会議は英語にて実施して組織運営にも参加いただき、優秀な学生を世界中から集めるかっこいい研究所へとなってほしい。国際化においても、旧来の大学組織がうらやむトップランナーとなってほしいと願います。

たかはし・さとし
安積徹教授（東北大理）の指導で学部および修士課程、北川禎三教授（分子研）の指導で博士課程、Dr. Denis L. Rousseau (AT&T Bell Labs.) と飯塚哲太郎博士（理研）の研究室にて博士研究員、森島績教授（京大院工）の研究室にて助手、後藤祐児教授（阪大蛋白研）の研究室にて准教授。2023年より日本生物物理学会会長。
